

『後撰集』伊衡女詠と「長恨歌」

—— 歌句「いづこをはかと」から(上) ——

北 條 暁 子

はじめに

『後撰集』恋二に、中将更衣、藤原伊衡女の歌が、

まかりいでゝ御ふみつかはしたりければ

中将更衣 参議伊衡女

けふすぎばしなまし物を夢にてもいづこをはかと君がとはまし (六四〇)

御返し

延喜御製

うつゝにぞとふべかりける夢とのみ迷しほどやはるけかりけん (六四一)

のように、醍醐帝からの返歌と共に入集する⁽¹⁾。この伊衡女詠の第二句から結句には、亡き女性を想ってその行方を尋ねて訪れようとする男性の姿が描かれる。

更衣にすぎない妃の一人にとって、帝への和歌にそうした関係性を詠むことは、分に過ぎた振る舞いにならないであろうか。しかも、二・(2)節に後述するが、伊衡女詠は葬る場所を指す「はか」の意を掛詞として裏に詠み込んでいる可能性が高く、そうした詠み方は『新編国歌大観』の範囲における初例であり、「墓」が和歌に詠まれることは稀である。仮に伊衡女が「墓」を詠んだとすると、その歌を帝に贈ったこと、あまつさえ帝が伊衡女の墓を捜し求める、もしくは訪れる、という内容が含まれることは異様に感じられる。しかし実際には、伊衡女詠は勅撰集入集という高い評価を得ている。もちろん、「まし」は「話手によつて仮想された事実の中で、現実には起こり得ない、また考へ得られないやうな事柄の判断として用ゐられる」という助動詞である。よつて、「まし」を伴うこの描写は仮想に過ぎないから問題はない、と言えは言えるかもしれない。それでも、仮想とは言え文字に表現され、帝の目に触れた意味は重い上に、その仮想が字数の大半を占める中将更衣詠は高く評価された。亡き女性を捜して訪ねる男の姿を仮想することは、いったいどのような意味を持つのであろうか。

亡き女性を愛惜し、捜して亡き女性の居場所を訪れる行為を、いま仮に、亡魂探訪と呼ぶことにする。日本の古典文学には、そうした亡魂探訪の描写が繰り返され、それぞれに対する先行研究も積み重ねられているが、本稿では、「いづこをはかと」の歌句を中心に亡魂探訪描写の源泉の解明を目指す。以下、先行研究を概観する。

伊衡女詠を先蹤とする、「いづこをはかと」の歌句を持つ平安時代の和歌群は、『小大君集』七二、『采花物語』四五、『源氏物語』浮舟巻七五三、『更級日記』二〇である。伊衡女詠と歌句は一致しないものの、『源氏物語』花宴巻一〇三の朧月夜詠、

うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじとや思ふ⁽⁴⁾

への影響関係も、『後撰集』『源氏物語』の古注釈⁽⁵⁾において指摘されている。

「いづこをはかと」の句を持つ和歌や歌句自体、その話型についての先行研究には、寺本直彦氏「延喜期後宮和歌と源氏物語」⁽⁶⁾、大槻修氏「かばね尋める宮」物語の復元⁽⁷⁾、柏木由夫氏「更級日記」の表現をめぐって⁽⁸⁾、今野（鬼塚）厚子氏「源氏物語」と『延喜御集』——「いづれのおほん時にか」への一想定⁽⁹⁾、池田和臣氏「源氏物語」の水脈——浮舟物語と『かばねたづぬる三宮』⁽¹⁰⁾、和田律子氏「更級日記」論にむけて——「荻の葉」の段から考える——⁽¹¹⁾、服部友香氏「小野小町鬪髑説話の展開・変遷——『江家次第』を中心に——」⁽¹²⁾などがあり、また、古注を含む各作品の注釈においても、相互の歌句の共通点が早く指摘されてきた。

本稿が検討対象とする、伊衡女詠および影響を与えた歌五首に共通する亡魂探訪の主題について、早くに整理し論じられたのは吉野瑞恵氏「朧月夜物語の深層」⁽¹³⁾であり、

それにしても残された者はなぜ「いづこをはかと」捜して歩かなければならないのだろうか。いくら当時の墓地在が荒れていたとしても、まともな死に方をした人の場合には、墓を探すあてどぐらいはあつただろう。残された者が死者の墓を探して歩かなければならないのは、死者が残された者の関知しないところで異常な死に方をしたからではないだろうか⁽¹⁴⁾。

と分析される。稿者は、吉野論と大きく重なる問題意識を持っており、対象とする作品も重なる為、当時の墓参について検討する点など一部において吉野論と論じ方にも自ら重なりが生じるが、本稿は、物語の展開に主軸を置いて論ずる吉野論と異なり、先蹤である伊衡女詠の解釈とその典故の検討に中心に置くものである。とりわけ、吉野論は朧月夜詠との「発想」⁽¹⁵⁾の類似を指摘されながらも、伊衡女詠の亡魂探訪の表現については、あくまでも深刻さの乏しい、恋死をほめかす修辞⁽¹⁶⁾に過ぎないものと処理される。対して稿者は、「いづこをはかと」という歌句を用いて和歌に亡魂探訪という話型を持ち込んだ先蹤こそ伊衡女詠であると考えており、伊衡女詠の仮想に描かれた亡魂探訪の世界を

検討しようとするものである。(上)においては、伊衡女詠の解釈の修正、詠作年次推定、第四句「いづこをはかとの新奇性の確認を行い、(下)においては、平安期における亡魂探訪の実態と霊魂観を、葬送や墓参を通じて検証した上で、伊衡女詠をはじめとする文学上の亡魂探訪が「長恨歌」に源を発している可能性を検討する。

一 『後撰集』伊衡女詠の先行注釈とその課題

『後撰集』伊衡女詠の注釈史を確認し、特に、注釈間に解釈の差異の見られる、まし・夢・はかという三点に留意してそれぞれの注釈の見解を押さえたい。

最も古い注釈に『後撰集正義』(二三〇四頃成立、以下、『正義』と略称する)の、

何期を遥に君はとはであるらむと云也。けふあすにかぎりたる身のたのみなきを、いつもはるかにあるべき身とおぼしてや、とひ給はざらむ、はかなしとらみ申たるなるべし。¹⁹⁾

がある。試訳するならば、「いつまでずっとあなた様は訪ねずにいるのだろうか、(ともすれば)今日明日が最期となる、当てにならない我が身を、常にずっと生きるはずの身とお思いになってか、お訪ねにならないのだろうか、はかないことだ、と怨み申し上げたのだろう。」となるうか。『正義』は助動詞「まし」を仮想でなく、単純な推量と解している。これは「中世における一つの用法の変化」²¹⁾であり、詠作時点での用法とは異なる。

「まし」自体に反実仮設の意あるのではなく、それは多くの場合伴える「ば」との照応と、「ものを」又は「を」の咏嘆によって醸成されるものと考えられ、²²⁾

と前後の文脈を重視する説もあるが、伊衡女詠初二句は「ば」「ものを」の双方を伴うため、確実に仮想と見做すことが出来る。よって、『正義』の解釈は、成立年代ゆえに生じた誤りと言える。また、「夢」という要素が一切考慮されず、

「はか」は「はかなし」と取り違えられている。「まし」の解釈の誤りと考え合わせると、『正義』は、成立こそ他の注釈に比べて格段に詠作時に近くとも、解釈は伊衡女詠の詠作時の意図からは遠い。

次に古い注釈は北村季吟の『八代集抄』⁽²³⁾であり、「はか」の表の意を「しるべ」とし、「墓」⁽²⁴⁾の掛詞と指摘する注釈の先蹤である。

まかり出て御文つかはし

更衣内裡を退出し給ひて、帝より御文遣したるべし。程有てとみゆ。

けふすぎばしまし物を

久々御音信もなきに思ひ侘て、已にけふ過ば死べかりしに、若死たらばいづこをしるべとかとはせ給はん、あやうくも御無音哉と也。いづこをはかは、そこはかと同じ心也。墓をそへたるべし。

との内容は、『正義』とは異なり、「まし」を仮想と正しく解している。

『後撰集新抄』⁽²⁵⁾（二八一四刊行）は、第三句「夢にても」を初めて説明する注釈であり、「仮にも」、「はかなき」と解して夢とは捉えない。助動詞「まし」、掛詞「はか」については『八代集抄』と同様に解する。

次いで現代注を概観する。解釈の共通点は以下の四点である。第一に、助動詞「まし」を仮想と扱う。第二に、設定を、便りの無さからの恋死と解する。第三に、「夢にても」を実際の夢と解する。第四に、古注釈に掛詞と指摘されていた「墓」の意味も表に出して訳す。

以下、現代注三種の違いのみを挙げる。仮想の含意は三種すべて異なり、木船重昭氏『後撰和歌集全釈』⁽²⁶⁾（以下、木船全釈と略称する）では、墓を訪れて頂くことはできない、片桐洋一氏校注の新大系⁽²⁷⁾（以下、新大系と略称する）では、墓に手紙を頂くことはない、工藤重矩氏校注『後撰和歌集』⁽²⁸⁾（以下、工藤校注と略称する）では、現実では期待し得な

いが死ぬと訪れが期待できる、と分かれる。この三種は、仮想の内容の位置付けから二種に大別できる。木船全釈、新大系は、手紙や訪問のある現実が望ましく、場所がわからずそれらが不可能になる死は忌避されると解する。工藤校注では、訪れを期待し得ない現実よりも、訪れられる可能性の生ずる死が願われると解する。工藤校注の注目すべき転換は、「まし」の解釈に二つある方向性のうち、「反実仮設の方が望ましくない意」⁽³⁰⁾で解した木船全釈、新大系とは異なり、「事実よりは仮設想像した事の方が望ましい場合」：(中略)：普通の希望とは違って、可能性のない、事実
に反する場合を想像した結果、空想的の希望となつた⁽³¹⁾という方の意味、つまり仮想的希望、吉田金彦氏『上代語の助動詞』(以下、吉田1973と略称する)に言われるところの「仮想・空しい希望」⁽³²⁾による解釈へ修正されたことである。

なぜ、工藤校注前後で、死の仮想の位置付けが真反対となつたか。理由は二つ考えられる。第一に、『後撰集』の詞書が、帝の手紙の到着との前後関係において、『延喜御集』とは逆の設定を持つこと、第二に、帝の手紙によって生かされる現実以上に死ぬことを庶幾するという解釈が、従来は受け入れられにくかつたことが挙げられる。補足しよう。詞書において、『延喜御集』では二日も経過してなお届いていなかった手紙、帝からの音信が、『後撰集』では届き、日数の経過も示されない、という設定の違いがある。よって、『後撰集』のみに見える、「現実では手紙を受け取った」設定を基準に据えようと、「死んでしまっていたかった」では、一見、歌の意味が通りにくい。しかしながら本稿は、伊衡女詠の「ましものを」を、工藤校注同様に仮想的希望と解釈することが順当と考える。なぜならば、内容的に考えて、現実に手紙が来ていようといまいと、初句で仮想されるのは、手紙が来ずに今日が過ぎてしまうという、帝を恋い慕う妃にとっては耐え難い状況であるからである。語法としても、吉田1973の、「「ずは……まし」の形式……空しい希望、はかない嘆きの意を表すものが……はるかに多い」⁽³⁴⁾との分析に合致する。その上で、本稿はもう一段階進めて、第三句以下の「夢にてもいづこをはかと君がとはまし」をも、詠作者が仮想的に希望する内容として解する必要がある。

ると考える。⁽³⁵⁾ その理由の第一は、吉田 1973 によって、伊衡女詠の結句の「まし」のような用法が、第二句と第三句の間を意味的に句点で区切るにせよ、区切らないにせよ、「果せない」「空しい希望」を指すこと⁽³⁶⁾がすでに明らかにされているからである。理由の第二は、短い一首という中に二度用いられる、「まし」を伴う二つの内容を一連の内容と見做す方が自然であり、逆に、一方は希望すると見做しながら、もう一方は忌避すると見做して、別個に扱うことは難しいように思われるからである。第二句を仮想的希望と見做すのであれば、第三句以下も仮想的希望と理解してはどうであろうか。さらに言えば、死ぬ仮想においては「夢にてもいづこをはかど君がと」ふ、ということ⁽³⁶⁾を期待できるからこそ、「死」を希望する、と訳すべきではないか。つまり、本稿なりに訳し直すと、

【『後撰集』伊衡女詠試訳】

もし今日が（お手紙の来ないまま）過ぎたとしたら、（恋の思いに耐えきれず）死んでしまっていたかったのに。（そうでもなければ期待できず、そうすれば、せめて死後なりと、）夢であつても、どこを（亡き私の居場所の）目当てと、（墓を）あなた様が探してお訪ねくださったでしょうから。

となるように思えるのである。ただし、このように解釈した先行研究はこれまでに無い。なお、「亡き私の居場所」を「墓」と見做すかどうかについては、後に二・（2）節において検証するが、結論を急げば、本稿は先行研究と同様に、「墓」と見做すことになる。したがって、本稿と先行研究の訳の違いは、帝による亡魂探訪、もしくは墓への訪れに対する評価に存する。禁忌に触れかねない、帝による墓への訪れを希望するはずはあるまい、という先行研究の判断は、詠作当時の社会通念に照らしても尤もではある。夢でもいいと制限を付けてすら、憚られるような内容であるかもしれない。しかし、勅撰集に採歌されるには、それ相応の理由があるはずである。本稿は、その「相応の理由」の解明を目指している。第三句以下描き出されるこの仮想には具体性があり、実に十九音が割かれて力点が置かれている。

読み手にイメージを結ばせるべく詠まれたこの仮想もまた、伊衡女が死ぬ仮想の中で起こる事柄である。その内容が仮に、伊衡女の描いた、叶わぬ空しい希望であるならば、第四、五句「いづこをはかと君がとはまし」で結ばれるイメージとは、いったいどのようなものであろうか。第三句「夢にても」によって、夢幻のうちの出来事となる可能性も提示されるが、帝が夢ないし現実において、亡き後宮女性の死後の在り処の目当てを訪れるという行動はどの程度あり得て、どの程度の愛情の深さに相当するのだろうか。命と引きかえにしてまで希望するに値する内容なのだろうか。この疑問が解ける時、伊衡女が「死」を希望して仮想する理由も明らかになるように思われる。

二 伊衡女詠について―仮想を支える現実と靈魂観

帝が亡き後宮女性の在り処の目当てを、もしくは目当てとしての墓を訪うことが、仮想や夢においてにせよ、歌に詠まれ、勅撰集に入るということが本当にあつてよかつたのであろうか。ましてや、それが庶幾され得たであらうか。二では、この課題を検証するために、仮想の内実に関わる事象を検討していく。

(1) 伊衡女と『後撰集』伊衡女詠の詠作年次について

まず(1)節では、伊衡女についてと、『後撰集』六四〇番伊衡女詠の詠作年次⁽³⁷⁾について押さえる。

藤原伊衡女は、「中将更衣⁽³⁸⁾」と呼ばれた、醍醐天皇の更衣である。その所生の源為明の生没年は未詳ながら、異母兄式部卿重明親王の日記『吏部王記』⁽³⁹⁾逸文天慶四₉₄₁年八月二十四日条に元服の記事が載る。異母兄弟の元服時の年齢から為明の元服も十五歳前後であつたかと推定すると、延長五₉₂₇年前後の誕生と推測される。

入内の時期は不明であるが、「中将」が父の官職に因むのであれば、伊衡が右近権中将に任ぜられた延長二₉₂₄年十月

十四日以降の或る時期と見做せる。この時伊衡は四十八歳⁽⁴²⁾、成人した娘を持つ年齢として充分であり、醍醐帝も寛平九897年に元服、即位されており、問題ない。為明の誕生推定年次にも合う。また、『延喜御集』において、『後撰集』六四〇番と同一の歌である伊衡女詠（『延喜御集』では一〇番）の前には、「かくて、かの女御、三年をへておこたり給て、後に朱雀、村上などはむまれ給へるなりけり、その御ももかのもひを、殿上人にいださせ給へりければ、さけのみなどしけるに」という詞書を伴って、伊衡と醍醐の贈答（八・九番歌⁽⁴³⁾）が載り、直後に当該の伊衡女詠（一〇番歌）が、

これひらの宰相、むすめをたてまつりたりけるが、まかでて、さとに二日ばかりありて、まゐらせける

という詞書を伴って続く。寛明親王（のちの朱雀）誕生が延長元923年七月、成明親王（のちの村上）誕生が延長四926年六月である。よって、仮に父の任中将から間もなく入内したとすれば、ちやうど両親王誕生の間の時期となり、歌の配列として自然である。

父伊衡の官位名表記が、直前の「伊衡の中将」⁽⁴⁴⁾（八番）から、『後撰集』六四〇番にあたる一〇番歌の詞書では「宰相」となったことは、詠作年次の推定に参照できるであろうか。「たりける」とあるから、奉ったのは宰相となつてからとは限らないが、伊衡女が退出して当該歌を詠じたのは父が参議であつた時期であるようにも読める。しかし結論としては、『後撰集』六四〇番歌は父伊衡の参議時代には詠まれ得ない。任参議は承平四934年、醍醐の崩御が延長八930年だからである。

『後撰集』六四〇・六四一番にあたる一〇・一一番の贈答の直後から、伊衡女の呼称が「御息所」と変わる。源為明が誕生したためであろう。よって、『後撰集』六四〇番歌の詠作年次は、『延喜御集』を読む限りでは、延長二924年十月以降の入内以後、同五年前後の為明誕生以前に絞ることが出来そうではある。ただし、伊衡の官位表記が詠作年次

と対応していなかった例から、詠作年次を絞る上で『延喜御集』の呼称には依拠しにくいことや、『延喜御集』の性質を検討された平野由紀子氏に拠って、「歌物語の一章段」のような「打聞の集成」で「史実の先後には矛盾がある」と頓着しない態度⁽⁴⁶⁾が指摘されていることから、詠作の下限を『延喜御集』によって絞ることはせず、醍醐の讓位、崩御につながる咳病罹患の延長八⁹³⁰年七月以前と広く取っておきたい。

『後撰集』六四〇番歌伊衡女詠は、延長二⁹²⁴年十月以降同八年七月以前という、延長年間に詠まれた歌であろう。

(2) 第四句「いづこをはかと」の成立について―「墓」の詠まれ方

次に、(2)節では、和歌における「墓」の詠まれ方を追いながら、伊衡女詠の第四句「いづこをはかと」について考察する。

伊衡女詠の仮想には、第四句に「はか」という語が登場する。一・に見たように、季吟以来の古注釈、現代注いずれにおいても、伊衡女詠の「はか」は「目当て(当て所、検討)」と「葬る場所としての」墓との掛詞と理解されており、本稿もこの理解を採りたい。⁽⁴⁶⁾ただし、古注釈は「墓」を歌意には訳出せず、現代注は歌意にも訳出するという差が見られ、かつ、「墓」の意を掛けて持つとすれば当該の仮想にとって重要な要素となるため、この歌句における「はか」という語の働きについて押さえておく。

古注釈は「墓」を歌の表の意味として訳出せず、「目当て」のみを訳した。たしかに、「墓」は歌語ではなく、あくまでも掛詞として詠み込まれている。以下、和歌における「墓」が、伊衡女詠以前にも以後にも詠まれにくい状況を、時代を追って概観したい。

『万葉集』において、題詞には「墓」は多く見える。⁽⁴⁷⁾そして、『歌ことば歌枕大辞典』「墓 はか」の多田一臣氏執筆

項（以下、多田執筆項と略称する）の指摘通り、「墓」を直接詠む歌もごく少数ながら有る⁽⁴⁸⁾。しかし総じて『万葉集』には、「墓」は題詞、「おくつき」は歌という使い分けが見られ⁽⁴⁹⁾、多くは歌に「墓」とは表さず、葬られた地名⁽⁵⁰⁾、もしくは「君之当 キミガアタリ」（巻一・七八）など臚化して詠む。逆に、葬る所という意味はもたず、接続助詞の「ば」と係助詞の「か」の表記に「墓」の訓のみ利用した「思墓 オモヘバカ」（巻四 相聞 五四〇）⁽⁵¹⁾ という歌の表記例がある。

本稿の取り組む問題に関わる平安時代の様相については、多田執筆項に、

平安時代に入ると、浄土教思想の影響を受けて、死者の追善はもっぱら自邸や寺で行われ、中期以降にならないと墓参が慣習化されない。勅撰集でも、詞書に「墓」が見えるのは『千載集』以後のことである。歌中に「墓」が詠み込まれる場合、掛詞として歌われることが多い。「はかなし」に掛けた例が目につくが、『更級日記』の「そこはかと（ソコガ目当て）知りてゆかねど先に立つ涙ぞ道のしるべなりける」（二二一）、「住みなれぬ野辺の笹原あととはかも（歩イタ形跡モ）なくなきかたにたづねわびけむ」（二二二）（中略）のような例もある。

とまとめられる。掛詞に言及されるが、「ハカ」は、「分量、目当て」⁽⁵²⁾と訳すことができ、和歌において「墓」との掛詞とされることが多い。語源的には分化した同根の語である可能性は高いが、当該の伊衡女詠の「はか」は、すでに『後撰集新抄』⁽⁵³⁾から、

いづこをはかとの。はかといふ言は。そこはかとなくなどいへる。はかに同じく。俗言にア、テドといはんがごとし。それを。此歌などにては。墓^{へか}にかけたるなり。

のように掛詞として指摘されている。

伊衡女詠の「はか」については、一点、指摘すべきことがある。伊衡女詠の詠作上に欠かせなかったと思しい先行

歌に、「寛平御時后宮歌合」の、

わがやどはゆきふるのべにみちもなしいづこはかとかひとのとめこむ
がある。

(冬・右・一二四)

「寛平御時后宮歌合」一二四番歌は、「いづこはかとか」という類似句を持つ先蹤であり、加えて、「雪に降り籠められた我が家には人の訪れが無い」と詠む趣が、『延喜御集』伊衡女詠の詞書の、帝から未だ手紙というとぶらいの無い里下がり二日目の状況に近似する。第四句の「はか」に、葬る場所の「墓」の意味がまったく無いことは、先行研究⁵⁵に指摘される通りではあるが、伊衡女詠以前の類似句はこの「寛平御時后宮歌合」一二四番歌にのみ見え、歌句の趣旨も近似すること、伊衡女の祖父敏行が同歌合に出詠していること⁵⁶、醍醐天皇の後宮の一員として作歌能力は必須であった伊衡女が、『古今和歌集』のみを読んで、『古今集』成立の大きな契機となった重要な歌合⁵⁷と評される「寛平御時后宮歌合」を目にしていなかったと考える方が不自然であることから、同歌合一二四番歌を影響歌と認めたい。

なお、同じ歌を『新撰万葉集』⁵⁸は

吾屋門者雪降牢手道裳無五十人童葬処⁵⁹人将来⁶⁰ (卷之下・四〇四)

と表記し、第四句が万葉仮名で「い」を「五十」、助数詞「づ」を「人」、「こ」を「童」、「はか」を「葬処」、「と」を「砥」とされる。読みを貸す表記である「葬処」は歌意と直接の関係を持たず、葬る処の「はか」と、目当ての「はか」は明らかに分化した別の語となっている。この、『新撰万葉集』の義訓「葬処」の文字が、伊衡女詠の作歌の着想に一定の役割を果たした可能性はないだろうか。(1)節において、伊衡女詠の作歌年次を延長年間と考えた。『新撰万葉集』下巻の延喜十三⁹¹³年の序文を信ずるならば、『新撰万葉集』下巻の成立⁶⁰が伊衡女詠に先行する。つまり、伊衡女詠の歌句「いづこをはか」とは、「寛平御時后宮歌合」一二四番歌に詠まれた詞続きを、『新撰万葉集』での表記と共に取り

込み、葬処という意味の「はか」を詠む歌の極めて少ない中、「墓」の意を掛詞として持つことで、「どこが（死んでしまった人の魂の在り処の）目当てなのか」と探す場所として墓を想起させる、という過程を経て成立した、そのように考えられる可能性もあろうか。

時代が下っても、「はか」の語が和歌に表れにくい傾向は同様で、『文集百首全釈』九五番の「つかふりて」の語釈にも、

先行例なし。「塚」は墓の意で、句題「古墓」に相当する。「そこはかと思ひ続けてきてみれば今年の今日も袖は濡れけり」（新古今・哀傷・841・慈円・覚快法親王かくれ侍りて、周忌のはてに、墓所にまかりてよみ侍りける）のように掛詞として「墓」を詠み込む例もあるが、詞書で「墓所」となっているも歌中では「苔の下」、「草の原」、「鳥辺野」、「はかなき跡」等で表現するのが通例⁽⁶¹⁾。

と端的にまとめられる通り、主として掛詞で現れる。

以上、和歌における「墓」が、伊衡女詠以前にも以後にも、表立っては詠まれにくい状況を確認しつつ、伊衡女詠の「いづこをはかと」の成立についても多少の考察を試みた。葬る処という意味の「はか」は、歌にそぐわない語なのである。古注釈、現代注いずれにおいても、伊衡女詠の「はか」に「墓」だけを見るものはなく、「目当て（当て所、検討）」の意味が必ず歌の文脈の中で認定されてきたことは尤もであると考ええる。「墓」を表立って詠む万葉語「奥つ城」が見られなくなったことは、墓の在り方の変遷により「奥つ城」と呼ぶにはささやかに変わったことに伴うものか、或いは、墓や死への忌避感から、和歌に表立って詠むことを避けるようになったものか。いずれにせよ、勅撰集入集歌である伊衡女詠の第四句「いづこをはかと」は、和歌に表立って詠まれにくくなった「墓」を掛詞の裏の意味として潜ませた可能性が考えられる。少なくとも、以後の和歌では掛詞に依拠して「墓」が詠み込まれていることが明らか⁽⁶²⁾。

である。伊衡女詠の第四句「いづこをはかと」がそうした「墓」の詠み方の先蹤となったとするならば、その意味で画期的な歌句であったと言えよう。伊衡女詠がなぜ「墓」を和歌の世界に再登場させ得たかについては、「下」において「長恨歌」との関わりを考察したい。

〔付記〕本稿は二〇一九年一〇月開催の和歌文学会第六五回大会において、「歌句「いづこをはかと」の詠作史―「長恨歌」摂取の可能性の検討―」と題して行った口頭発表の一部に基づき、その後得られた知見を加えたものである。貴重なご教示を賜った先生方に深謝申し上げます。また、本稿が「第十二回未来を強くする子育てプロジェクト スミセイ女性研究者奨励賞（住友生命）」の助成による成果の一部であることをここに謝す。

（二）伊衡女詠について―仮想を支える現実と靈魂観（3）以降は「（下）」に続く。「（下）」においては、引き続き伊衡女詠の仮想の実体に接近すべく、伊衡女詠の「長恨歌」受容について、醍醐朝を中心とする平安期の墓をめぐって考察を行う。）

注

- （1）二荒山神社本、片仮名本は返歌を欠く。
- （2）冷泉家時雨亭文庫編『後撰和歌集 天福二年本』（朝日新聞社 二〇〇四）を翻字し、濁点を施した。清輔本系統について、二荒山神社本（高橋良雄・杉谷寿郎編『二荒山神社本 後撰和歌集』桜楓社 一九八七、以下「二」）、片仮名本（『後撰和歌集3』古典保存会 一九三三、以下「片」）により詞書と和歌の異同のみ記す。（詞書）まかりいでゝまかりいでゝのち（二）マカデ、

ノチ(片)つかはし―たまはせ(二、片)(和歌)いづこをはかといづこはかとか(二)イヅコニカトカ(片)。本稿では、歌句「いづこをはかと」を考察するという観点から、校異についてはこれ以上言及しない。

この贈答は『延喜御集』にも見える(一〇・一一番)。書陵部蔵『代々御集』(五〇一・八四五)により、適宜濁点、読点を付す。これひらの宰相むすめをたてまつりたりけるが、まかでゝさとに二日ばかりありてまいらせける

すぎばしなましものを 集如此 君が
けふきてもきえなまし かげ夢にてもいづこをはかと人のとはまし

御かへり

うつゝにぞとふべかりけるゆめとのみまどひしひとやはかなかりけむ

伊衡女詠については、詞書、および上二句が『後撰集』と異なる。以下、歌番号、和歌の引用は、特に断らない場合『新編国歌大観』に拠る。

(3) 時枝誠記(講談社学術文庫『日本文法 口語篇・文語篇』二〇二〇 文語篇500頁 『日本文法 文語篇―上代・中古』岩波全書 一八三 一九五四と『同 口語篇』をまとめた書籍)。

(4) 語としては、朧月夜詠の「消えなば」が伊衡女詠の「しなまし」と、「尋ね」「問は」が伊衡女詠結句の「とは」と、「草の原を」が伊衡女詠第四句の「はか」と対応する。内容としては、伊衡女詠と朧月夜詠はいずれも、亡き女性を想い、その死後の在り処として墓を訪れる男性の姿を想起している。

(5) 賀茂真淵『源氏物語新釈』岸本由豆流『後撰和歌集標注』(二八一三年成立 以下、『標注』と略称する)、『後撰集新抄』(二八一四 刊行)。

(6) 『源氏物語受容史論考 続編』(風間書房 一九八四) 9〜10頁、初出『青山語文』四 一九七四・三。

(7) 『中世王朝物語の研究』(世界思想社 一九九三) 207頁、初出「かばね尋ぬる宮の物語」上『語文叢誌』一九八一・三および「同題」下『日本のことばと文芸』第二集一九八〇・一一 和泉書院。

『後撰集』伊衡女詠と「長恨歌」

- (8) 『平安時代後期和歌論』(風間書房 二〇〇〇) 399〜401頁、初出『昭和学院短期大学紀要』一七 一九八一・三。
- (9) 『天皇と和歌―三代集の時代の研究―』(新典社研究叢書161 二〇〇四) 97〜98頁、初出は源氏物語研究会『源氏物語の探究 第6輯』風間書房 一九八一、以下、今野論と略称する。
- (10) 『源氏物語表現構造と水脈』(武蔵野書院 二〇〇一) 所収、とくに452〜458頁、初出『茨城大学人文学部紀要 人文学科論集』一七 一九八四・三。
- (11) 和田律子・久下裕利編『更級日記の新研究―孝標女の世界を考える』(新典社二〇〇四) 150〜152頁。
- (12) 「平安期における小野小町享受」平成二七2015年度名古屋大学大学院文学研究科学位(課程博士)申請論文 第二章三節129頁。
- (13) 『王朝文学の生成 『源氏物語』の発想・「日記文学」の形態』(笠間書院 二〇一一) 所収、初出『国語と国文学』六六卷一〇号 一九八九・一〇。以下、吉野論と略称する。吉野論は朧月夜詠を中心として、歌語「草の原」をもつ和歌に言及され、上野英二「平安朝における物語―長恨歌から源氏物語へ」(『国語国文』五〇巻九号 一九八二・九、王朝物語研究会編『研究講座 源氏物語の視界1―準拠と引用』(新典社 一九九四) 所収、『源氏物語序説』(平凡社選書一六〇 一九九五) 再録)を援用して「朧月夜の歌にも「長恨歌」のイメージが投影されているらしい」と追認の上、歌句「いづこをはかと」の歌句を持つ五首から『更級日記』の亡姉追悼歌群、散逸物語『かばねたづぬる宮』、『源氏物語』のいわゆる「夕顔物語」、『伊勢物語』二条后章段等々の類似を指摘され、「女君の死後に男君が恋人の最期の地を捜す」という話型を追われた。
- (14) 吉野論15頁。
- (15) 吉野論は、賀茂真淵『源氏物語新釈』の朧月夜詠に対する注が、伊衡女詠と『小大君集』七二番歌を引いて「是らをもて作りたる物也」と注することをもとに、「たしかに、ここに引用されている二首の歌は、「草の原」という表現こそ用いられていないものの、朧月夜の歌に発想が似ている」(14頁)と指摘される。
- (16) 「中将更衣と小大君の歌の場合、背後にある現実には浮舟のような深刻な状況ではなく、恋死をほめかすことが、相手を自分にひきつけるためのひとつの手段になっていると考えられる。」(吉野論14・15頁)。

「いづこをはかと」という表現には、先蹤がある。「寛平御時后宮歌合」の、

我が宿は雪ふる野辺に道もなし
いづこはかとか人のとめこむ

という歌である。この「はか」は掛詞ではなく、イメージのふくらみもない。中將更衣や小大君の歌は、この歌をふまえ、さらに掛詞の面白さをねらったものかもしれない。(同15頁)。

(17) 八代集の注釈は複数あるが、『後撰集』については一部の和歌にのみ付されることが多く、伊衡女詠への注は現代に至るまで少ない。よって、和歌の解釈が示される注釈についてはすべてを網羅的に確認する。なお、本文に引用しなかった岸本由豆腐の『後撰和歌集標注』(二八一三成立)は、伊衡女詠が影響を与えた歌三首を挙げている。

(18) 嘉元二¹³⁰⁴年頃。藤川晶子『後撰集正義』の成立(『和歌文学研究』七七 一九九八・一二)および『和歌文学大辞典』「後撰集正義」の項を参照。

(19) 『日本歌学大系』別巻五「後撰集正義」361頁。

(20) 橋本進吉『改制新文典別記 文語篇』(富山房 一九三九)が、「本来は実際さうでない事を仮にさうだと想定していふ語ですが、又「む」と同様の意味でも種々の場合に用ひられます」(第二篇第十三章132頁)と説明する後者にあたる。

(21) 小林賢次「中世における反実仮想の条件表現―呼応形式の推移を中心に―」(『日本語条件表現史の研究』ひつじ研究叢書(言語編) ひつじ書房 一九九六 第三章) 81頁、初出『香川大学教育学部研究報告』第I部三七 一九七四・一〇。具体例が、

条件表現に用いられながら、反実仮想ではないと目される例が現れ出しており、注目される。

⑨ 見るからに鏡のかげのつらき哉かゝらましかばかゝらましかば(九冊本宝物集・三153) (快円法師作)

例⑨は「マシカバ……マシ」の呼応例ながら、条件句「かからましかば」は反実ではありえない。(80頁)

と挙げられる。用例を採られた古典文庫『宝物集(九冊本)』の底本は七巻本系統の一本(古典文庫二五八「宝物集 解題」浅見和彦・小島孝之両氏執筆)で、快円法師詠は国歌大観番号二七九番歌。成立は「七巻本は1183年(寿永2)ごろの成立かと推定される」(『日本大百科全書(ニッポニカ)』「宝物集」浅見和彦執筆項)という。

同書は「中世という「マシ」が衰退しつつある時代」(88頁)の用例を検討され、

条件表現に用いられた「モノヲ」は、現代語における「バ……ノニ」のような表現と同様、反実仮想であることを明示する役割をある程度果たしている (93頁)

と指摘される。中世ですら仮想を意味したことを参考にすれば、平安時代の伊衡女詠第二句の「ましものを」の「まし」が、
事実には反する仮想を意味したことは間違いないであろう。

(22) 村内英一「推量の助動詞『まし』の語性」『和歌山大学文学芸学部学芸研究人文科学』1 一九五〇・一二。

(23) 『北村季吟古註釋集成27 八代集抄三 後撰集上』(新典社 一九七九) 260頁より翻字し、濁点を付した。

(24) 以下、「墓」と記す場合は、用字にこだわらず、葬る所という意味を持つ「はか」を指すこととする。

(25) 『後撰集新抄(復刻版)』(一一八―一四刊行 一九八八 風間書房) 497・498頁。「久しく。御おとづれのなきに。思ひわびて。今日の過なば。死侍るべきものを。もし死侍て後ならば。かりにても。いづこをあてに。御消息もせさせ給はんぞとなり。三ノ句夢にてもは。仮(かり)にもなどいはんが如く。はかなき御おとづれも。といはんが如くなるべし。「春のよの夢ばかりなる手枕に」云々。「夢ばかりなるあふ事を」云々。などの夢といふ詞の類なり。いづこをはかとの。はかといふ言は。そこはかとなくなどいへる。はかに同じく。俗言にアテドといはんがごとし。それを。此歌などには。墓(ハカ)にかけたるなり。」

(26) 笠間注釈叢刊13 一九八八 420・421頁。和歌の訳は「お便りもいただけにままで、今日が過ぎましたら、もうこのわたくしのことなど忘れておしまいになった、と思つて、その悲しみのあまり、死んでしまひようから、たとひ夢の中でも、どこを目当てに、お墓を天子さまが訪れてくださいますか。できないこととございます。」(傍線稿者)。

(27) 『後撰和歌集』(新日本古典文学大系 岩波書店 一九九〇) 185頁。和歌の訳は「お便りのないままに今日が過ぎてしまひましたら、わたくしは悲しみのあまり死んでしまつていたでしよう。もし死んでいれば、たとえ夢でありましても、どこが墓かと検討をつけてあなたがお便りをくださることもなかったでしよう。」(傍線稿者)。

(28) 工藤重矩校注『後撰和歌集』(和泉古典叢書3 一九九二 和泉書院) 127・331頁。和歌の訳は「今日お手紙が無くて過ぎたならば、

私は死んでしまおうものを。もしそうになりましたなら、たとえ夢の中のこととしても、どこを目当てとして私の墓を訪れるのでしょうか。」(傍線稿者)。

(29) 「夢にても」に、「現実では期待しえないがとの含意。」と注された。明文化されないが、死ぬと訪れが期待できる、という意味になる。

(30) 松尾捨治郎『国語法論攷』(追補版 白帝社 一九六一 文学社 一九三六) 733頁。

(31) 前掲注(30) 732・733頁。単なる希望とする理解は「誤謬」と説明される。

(32) 『小学館全文全訳古語辞典』(二〇〇四)「まし」の項に採用される文法用語。

(33) 『吉田金彦著作選5 上代語の助動詞 上』(明治書院 二〇一〇 『上代語の助動詞』一九七三の内容) 323頁。同書321頁には、

万葉歌への武田祐吉『万葉集全註釋』(改造社 一九四九)の「不可能の希望」(絵にかいた希望の描写」という説明も引用される。

(34) 前掲注(33) 吉田 1973、315頁。

(35) 一首の中に、「ましものを」と述べ、その後で単独の「まし」が続く和歌は当該例のみである。ただし類例として、順番が逆の例「ことならばあはれとみましめのまへに涙の露ときえましものを」(和泉式部統集・三八四)、「まし」に「を」がつく例「みてぐらにならましものをすべ神のみてにとられてなづさはましを」(拾遺集・神楽歌・五七八)、一首の中に「ましを」が二度詠まれる例「妹之家毛 繼而見麻思乎 山跡有 大嶋嶺尔 家母有猿尾 いもがいへも つぎてみましを やまとなる おほしまのねに いへもあらましを」(万葉集卷二・相聞・九一)がある。類例において、「ましものを」と「まし(を)」が示す二つの仮想は一連の仮想であり、現実にはほとんど期待できないながら、希望するものである。なお、『万葉集』の本文、訓は『新編国歌大観』により、同書表記に倣い西本願寺本の訓をカタカナ、新訓はひらがなで示す。歌番号は旧『国歌大観』による。

(36) 第三句以下を、初句の「今日来ずは」に続く¹と見做せば、第二句同様に「ずは……まし」の形式と見做せるため、結句の「まし」は「空しい希望」である可能性が高くなる。初句が第二句まででいったん切れると見做し、第三句からの内容を受けた結句の「まし」を「呼応形式を持たない文末用法の「まし」²(319頁)と見做す場合にも、

①「まし」全用例の1-3の勢力である。②すべて詠嘆的に希望の意を表す。③ほとんど二文構成の歌から成り立っている。のような用法上の特徴がある。(中略)妹が家も継ぎて見まし「麻思」を。大和なる大島の嶺に家も有らまし「猿」を。(万2・九一)これは、「貴女の家も続いて見たいものだ。大和の大島の嶺に私の家が有ったらよいのに」という意で、この「まし」は二つとも果せない希望の意を表している。続き見ることも、山に家があることも叶えられない願いである。(320・321頁)と分析されている。

(37) 一見本論の主旨からは外れるようであつても、敢えてここで年次の考証を挟み入れる理由は、次節(2)において『新撰万葉集』下巻との影響関係を考察する上で、予め詠作年次を絞る必要がある為である。伊衡女の入内時期も、詠作年次を考証する上で必要となる。

(38) 『後撰集』にはこの呼称で入集し、天福二年本には「参議伊衡女」との定家の勘物が書き入れられている。

(39) 米田雄介、吉岡真之校訂 史料纂集 続群書類従完成会 一九七四。逸文の典拠も同書を参照されたい。

(40) 藤井讓治、吉岡真之監修・解説『醍醐天皇実録 第二巻』(天皇皇族実録16 ゆまに書房 二〇〇七)、東京大学史料編纂所大日本史料総合DB、『国史大辞典』等により確認。

(41) 『公卿補任』承平四九三年。

(42) 承平四年の時点で五十九歳であることから逆算。貞観十八876年生まれ。

(43) 『延喜御集』のこの贈答(八・九番)が『大鏡』の典拠であることは、久曾神昇編著『八代列聖御集』(文明社 一九四〇)の解題に、「大鏡に「村上か朱雀院かの……」とあるのは、この御集によつたことが明瞭となり、玉葉集や夫木抄が 村上天皇に限つてゐるのは見誤か省略によるのであらう」(21〜22頁)と早く指摘された。

(44) 「かくて、かの女御、三年をへておこたり給て、後に朱雀、村上などはむまれ給へるなりけり、その御ももかのもひを、殿上人にいださせ給へりければ、さけのみなどしけるに」という詞書を伴う八番歌の作者名表記が「伊衡の中将」。右近衛権中将に任ぜられた延長三924年からの十年の間にこの行事があり得たか確認すると、寛明親王(のちの朱雀)誕生は延長元923年七月

二十四日なので当てはまらない。成明親王（のちの村上）誕生が延長426年六月二日であり、その百日の祝いには中将という官位表記は相応する。ただし、「村上」という表記があることから、後世に記されたことは間違いなく、この官位表記から成明親王であると断定することは難しい。

(45) 「物語的家集―延喜御集を中心に―」（『平安和歌研究』風間書房 二〇〇八）73〜76頁、初出『和歌文学論集4 王朝私家集の成立と展開』風間書房 一九九二。

(46) 西耕生「頭中将の常夏」と伊勢物語二十一一段―「いづこをはかりとか我も尋ねむ」私注―（『文学史研究』四七 二〇〇七・三、以下西論文と略称する）は、「いづこをはか」とを「和歌の定型表現」と捉え、「はか」に「葬」をあてた用字や（中略）「死なまし」「死なば」という仮想表現などを考え合わせれば、目あてを意味する「はか」に「墓」の意が掛けられていること明らかであろう。」と触れられた。ただし、後述する通り、「いづこをはか」という歌句を持っていたとしても、「墓」の意味を掛けて持つようになるのは伊衡女詠からで、西論文が含まれた「寛平御時后宮歌合」一二四番歌（『新撰万葉集』四〇四番歌の表記は、西論文において「墓」が掛かる根拠ともされた）には「墓」の意は詠み込まれない。

(47) どう訓じたかという問題をはらむが、『古事記』『日本書紀』『風土記』にも「墓」の字や「はか」と読める「陵」が多数記されることと軌を一にしていよう。山口佳紀・神野志隆光校注・訳『古事記』（新編日本古典文学全集 小学館 一九九七）に「陵」の字は「墓所にあてられた丘陵の意」では「ミササギ」、「葬った墓所」では「ハカ」と訓ぜられる（中巻 垂仁天皇212頁頭注）。『日本書紀』『風土記』も新編日本古典文学全集に拠る。

(48) 多田執筆項にすでに指摘されている用例にはなるが、『万葉集』巻九の菟原処女墓の詠は、題詞に「墓」と記し、長歌一八〇九番に「処女墓」「壮士墓」、反歌一八一一番に「墓上之」と詠む。意味は葬った所、漢字は「墓」、西本願寺本の訓「ツカ」、現代の訓「はか」である。額田王の挽歌では、意味は葬った所、天皇陵のため漢字は「陵」、西本願寺本の訓、現代の訓ともに「はか」である。

(49) 巻三・挽歌・四三二では題詞に「勝鹿真間娘子墓」とされる一方、長歌に「勝壮鹿乃 真間之手児名之 奥柳（オクツキ）」、

『後撰集』伊衡女詠と「長恨歌」

反歌の四三二に「勝壯鹿之 間間能手児名之 奥津城処（オクツキトコロ）」と歌われ、巻九・挽歌・一八〇一でも、題詞「葦屋処女墓」、長歌「葦屋乃 莧名日処女乃 奥城（オキツキ）」、反歌一八〇二「莧会処女乃 奥城（オキツキ）」である。

(50) 題詞に「御墓」と記すが歌には「吉隠之 猪養乃岡」と地名を詠む（巻二・挽歌・二〇三）等の例。

(51) 吾背子尔 復者不相香常 思墓 今朝別之 為便無有都流。

(52) 「そこはかと」には、「其処は彼と」の意で、対象の状況をはつきりと言い定める意とか、あるいは「はか」は目標・目安の意で、そこを目標としての意とかいう。（『角川古語大辞典』「そこはかと」の二説があるが、墓と掛詞になり得ることは八行転呼が起きていないことを示唆するため、後者の「はか」は目標・目安の優位性を示すと考えられる。『小学館 全文全訳古語辞典』「そこはかと」の項を参照。更級日記の和歌を例に挙げ、「参考」として、「平安中期以降、語中語尾のハ行音はワ行音に転ずるが、この語は「例」からもソコハカで、ソコワカとはならなかったと考えられ、珍しい例外とされる。」と記される。）

(53) 前掲注（25）『後撰集新抄（復刻版）』【64】。

(54) 「伝菅公筆「寛平御時后宮歌合」摸本」（有吉保氏『新古今和歌集の研究 続篇』笠間書院 一九九六）に拠る。

(55) 前掲注（9）今野論は、「いづこをはかと」という歌句の特異さをもって、『源氏物語』中のこの歌句は『延喜御集』からの影響であると論じられた。そして、「寛平御時后宮歌合」一二四番歌が「いづこはかと」という類似句を持つ先蹤であると触れられたが、葬地の「はか」の意が掛からない為、検討対象から除外された。前掲注（13）吉野論もほぼ同様で、「寛平御時后宮歌合」一二四番歌の「いづこはかとか」を「いづこをはかと」の先蹤と認められたが、「この「はか」は掛詞ではなく、イメーヂのふくらみもない。中将更衣や小大君の歌は、この歌をふまえ、さらに掛詞の面白さをねらったものかもしれない」（15頁）と数行触れるに留められた。

(56) 出詠した者の中で最高位の敏行は、「開催に重要な役割を果たしたのではないか」とも想定されている（村瀬敏夫「藤原敏行伝の考察」『平安朝文学研究 作家と作品 岡一男博士頌寿記念論文集』有精堂 一九七二 669頁）。

(57) 『和歌文学大辞典』「寛平御時后宮歌合」の項（泉紀子執筆）に拠る。

(58) 寛文七年版本（京都大学文学部国語学国文学研究室編『新撰万葉集 京都大学蔵』京都大学国語国文学資料叢書十三 臨川書店 一九七九）に拠る。

(59) 『新撰万葉集』の表記では助詞が明確にされず、「いづこをはかと」「いづこはかとか」の両様に読める。

(60) 『新撰万葉集』が、それも下巻が、どの程度広く享受されていたかを考える必要はあるうが、伊衡女を享受圏の外に置くべき必然性も無い。

(61) 文集百首研究会『文集百首全釈』（歌合・定数歌全釈叢書八 風間書房 二〇〇七）「つかふりてそのよもしらぬ春の草さらぬ別と誰したひけん」（定家 句題「古墓何代人」 藏中さやか執筆箇所）。

(62) 「はじめに」において言及した、「いづこをはかと」という歌句を持つ『小大君集』七二、『栄花物語』四五、『源氏物語』浮舟卷七五三、『更級日記』二〇のほか、二・(2) 節で一部を引用した多田執筆項の指摘する、「はかなし」「そこはかと」「あととはかも」などの語句を用いた和歌などがある。

（本学大学院博士後期課程）